

優秀賞

認知症とつきあっていくということ

吹上中学校 一年 坂上 眞菜

昨年秋、まだ暑さがのこる頃、私の祖父は亡くなりました。

私の祖父は認知症でした。私が祖父の認知症の話聞いたのは、祖父が亡くなるちょうど一年前くらいのころで、私が学校から帰ると父から

「じいちゃんが認知症になったんだって。それで思ったよりも進行がはやいみたいで。だから、もしかしたら、眞菜のことも忘れてしまう日がくるかもしれない。」

と告げられました。

私はこのとき小学五年生だったし、父が福祉施設で働いているという影響もあって認知症になると、家族の顔や名前、物の名前、自分が行ったことも忘れてしまう、という話を聞いたことがありました。なので私は、祖父が私のことを覚えているうちに会いたい、と思いました。

でも、祖父は島に住んでいたもので、会いたい、と思っても簡単にいける距離ではありませんでした。結局会いにいったのは小六の夏でした。

小六の夏、いとこと私二人で祖父の家に遊びにいきました。

家にはいると祖父はテレビを見ていました。私が、

「ただいま。」

というと、祖父はやさしく微笑みました。私は安心しました。覚えていてくれたんだ、そう思いました。でも、私が、

「じいちゃん、眞菜だよ。覚えてる。」

と聞いてもなにも答えてくれません。私はこのとき祖父が私のことを覚えていない、ということに気付きました。

私はそのことが分かったとたん、祖父への接し方が分からなくなってしまうました。

その日から私は祖父を避けるようになりました。そのまま家に帰ることになりました。

私は自分の家に帰ってから、祖父を避けてしまったことを後悔しました。次、いつ会えるかも分からないのに、そう思いながら生活していました。

祖父が亡くなった日、私はいつも通り学校に行って帰ってきました。学校から帰ると、

「おじいちゃんが死んだって。」

と告げられました。私は信じる事ができませんでした。

「えっ死んだって、えっ。」

私は頭にあの夏休みのことが浮かんできて胸が苦しくなりました。

私は心にモヤモヤを抱えたままお葬式に出席しました。

お葬式にはたくさんの方が来てくださって祖父はたくさんの人に愛されているんだな、と思いました。

お葬式がおわり、みんなで食事をしていると、祖母が私のもとに一枚の写真をもってきました。その写真は前、いとこと遊びに行ったときにみんなで撮ったものでした。祖母は私に祖父が写真を見ながら泣いていたと教えてくれました。私は最初は不思議に思いました。でも私はきっと私のことを少しでも思い出してくれたんだ、と考えました。祖父は私のことを完全に忘れたわけではなかったんだと思います。なのに私は祖父につよくあたってしまいました。

私はいまでも祖父と認知症とちゃんと向きあうことができなかったことを後悔しています。でも私はもうにげたくありません。また、もし身近に認知症の方がいたときは私から話しかけてあげたいです。そして、もし困っているときは私が教えてあげたいです。

